

立教大学学術推進特別重点資金（立教 S F R）
プロジェクト研究（共同プロジェクト研究）
2014年度研究【成果】報告書

研究代表者	所属部局・職	氏名		
	社会学部・教授	間々田 孝夫 印		
研究課題	ポスト・アメリカ化時代の消費社会研究——日中同時調査に向けて			
研究組織	所属研究機関・部局・職	氏名		
	駒澤大学 GMS ラボラトリ・研究員 （申請時：社会情報教育研究センター・助教） 社会学部・助教 社会学部・教育研究コーディネーター 弘前学院大学・社会福祉学部・講師 信州大学・人文学部・准教授 文京学院大学・人間学部・准教授 慶應義塾大学・非常勤講師 （申請時：早稲田大学社会科学総合学術院・助教） 早稲田大学文学学術院・助手	廣瀬 毅士 三田 知実 野尻 洋平 藤岡 真之 水原 俊博 寺島 拓幸 鈴木 康治 畑山 要介		
研究期間	2013年度 ～ 2014年度			
研究経費	2013年度	2014年度	年度	総計
(上段：支出金額)	2,096,956 円	3,884,433 円	円	5,981,389 円
(下段：採択金額)	2,109,000 円	3,885,000 円	円	5,994,000 円

研究の概要 (200～300字で記入、図・グラフ等は使用しないこと。)

本プロジェクト研究は、経済社会学の立場を中心としつつ、日本との比較、およびグローバルな消費社会の動向という観点から、中国の消費者意識・消費者行動を調査し、分析しようとするものである。

プロジェクトの最終年度にあたる2014年度は、前年度までの文献研究、フィールドワーク、仮説の構築をふまえて、調査票を完成させ、質問紙調査をおこなう。調査票の作成、実査準備、実査、実査後の調査票エディティング等については、研究協力者との緊密なやり取りのもとで実施する。さらに、実査後すぐに回収したデータのエディティング、データクリーニングをおこない、データセット完成後、データ分析、報告書原稿執筆をおこなう。(291字)

キーワード (研究内容をよく表しているものを3項目以内で記入。)

[グローバル化] [消費社会] [質問紙調査]

研究【成果】の概要 (図・グラフ等は使用しないこと。)

本プロジェクト研究において検討する消費文化の動向は、大きく分けて以下の三つの論点である。

- A. 消費の多様化：消費の多様化は、すでに日本では 40 年ほど前から主張されてきた長期的動向であり、その内容と評価はさまざまであるが、現代消費文化の大きな特徴とされてきた。
- B. 消費の脱物質主義化：多様化とほぼ同時に主張され、バブル崩壊後は特にその傾向が顕著であるのが脱物質主義化であり、サービス消費、情報消費、文化消費といった分野でその重要性を増している。また、環境問題や倫理的消費とのかかわりの中で、さまざまな脱物質的消費スタイルが模索されている。
- C. 消費の質的高度化あるいは深化：消費がより高度なものに変化するという見方は、当たり前のようであり必ずしも十分に認識されてこなかった。高度化の内容として富裕層向け高額品や技術的な高性能製品については従来から着目されてきたが、それ以外の面で高度化する（あるいは深化）という傾向は、最近になってようやく認識され始めたものである。

以下は、本プロジェクトメンバーが各自の問題意識から上記について分析・考察をおこなった成果の概要である。

1. 研究代表者の間々田は、上記三つの論点を含む「消費三相理論」を提唱しており、その図式に沿って、中国の消費者意識を分析した。具体的には、間々田が消費三相理論で設定した第一から第三まで三つの消費文化が、中国の消費者においてもうまく別出できるかどうかを、因子分析によって明らかにした。その結果、現代中国においてもはっきりと三つの消費文化に相当する因子を抽出できることがわかった。そして、想定したような中国的特殊性は見られなかった。今後は、日本のデータについても出来る限り同様の分析を行ない日中の差異を明らかにすること、消費者意識の個別項目ごとにきめ細かい分析を加えること、因子間の関連をより詳細に分析することが課題となる。

2. 研究分担者の廣瀬は、中国での統計調査実績のある既存の国際比較調査についてサーベイしつつ、本研究課題での調査実施計画を策定した。具体的には、上海市を調査研究フィールドに設定した理論背景・都市背景に照応した市内調査地域を設定するとともに、統計的標本設計理論にしたがった調査地点数および個々の調査地点を設定し、現地大学の研究協力者・呉金海講師と協力して効果的な中国語版調査票および調査実施方法を研究した。今後の研究課題は、現地の調査文化を踏まえてさらに科学的な標本抽出および実査の手法を開発し、国民性・実査手法・ワーディングによる差異を考慮した統計的分析にたえ得るデータ収集手法を追求することである。

3. 研究分担者の三田は、上海街頭調査結果のうち、国外高級ブランドと、国外ファストファッションの消費動向（所有点数）を捉えるための分析を行った。分析結果は、以下のとおりである。まず国外高級ブランド所有点数に有意な正の効果をもたらす変数は、本人の収入であった。つぎに国外ファストファッション所有点数に有意な正の効果をもたらしている変数は、女性ダミー変数、本人の収入と、都市戸籍ダミー変数であった。有意な負の効果をもたらしているのが、年齢であった。国外ファストファッションの消費動向は、国外高級ブランドよりも活発であった。今後の研究課題は、上海現地フィールドワークの結果と本分析結果を対応させながら、考察を深めることである。

4. 研究分担者の野尻は、インターネットリテラシーおよびオンラインショッピング利用にたいする基本属性および消費態度変数の効果について探索的な検討をおこなった。分析の結果、第一に、インターネットリテラシーにたいする基本属性の効果としては、教育年数、個人年収、子持ちダミーが正の効果、年齢が負の効果であった。第二に、オンラインショッピングにたいする効果として、消費態度変数のうち個性志向やライフスタイル志向が正の効果であった。また、男性ダミーや年齢が負の効果、教育年数、個人年収、子持ちダミーが正の効果であった。今後の課題は、「80 后（80 年代以降生まれ）」とそれ以前の世代間の比較をおこない、中国社会の変動が消費態度にいかなる断絶をもたらしているかを検証することである。

5. 研究分担者の藤岡は、健康に対する関心についての日中間の比較を行った。分析には、2010 年の東京圏の調査データと、2014 年の上海の調査データを使用した。分析の結果、第 1 に、東京と上海では、健康に対する関心の強さに大きな違いがないということが明らかになり、第 2 に、上海の若年層において、脱物質主義的な意識と健康志向との結びつきが強くなっている可能性があるということが明らかになった。ただし第 2 の点は、曖昧さを含んでおり、今後のさらなる検討が必要である。今後の大きな課題は、中国の医療、健康法の伝統を念頭に置きながら、上記 2 点目の問題も含めて、日中間の健康に対する関心の質的違いを明らかにしていくことである。

研究【成果】の概要 つづき

6. 研究分担者の水原は、消費社会的価値意識と消費主義的態度との関係性について、東京圏、上海市でそれぞれ 2010 年、2014 年に収集した調査データを用いて試論的な比較検討をおこなった。データ分析の結果、第一に、東京圏、上海市ともに、消費社会的価値意識と消費主義的価値意識との関係性は一様ではなく、多元化していること、第二に、東京圏と上海市とで多元化した関係性に、傾向的な違いがおおむねみられないことなどが示唆された。今後の課題は、中国社会や中国の地域社会の社会構造、文化、歴史の特徴に関する社会的な理解を深め、上海データのサンプリングや分布に関する問題点を解決するよう努め、本格的な国際比較分析に取り組むことである。

7. 研究分担者の寺島は、消費社会化のスピードと歴史的経路が上海における消費主義や消費文化に与える影響を実証的に分析することを見据え、消費社会にかかわる社会意識、消費態度、環境配慮型消費行動の特徴を東京圏の消費者と比較した。分析の結果、第一に、上海市において自己利益の追求、個人主義の先鋭化、伝統や慣習の軽視を示す社会意識や消費態度が強くみられた。第二に、上海市の消費者も東京圏並みに環境配慮型消費行動を実践していることが示されたが、東京圏ではみられなかった学歴との関連が認められた。今後の課題として、上海市調査データに存在するサンプルバイアスと回答バイアスを考慮した慎重な統計分析と解釈を用いた比較研究が求められる。

8. 研究分担者の鈴木は、現代中国（上海）の消費の節度について、儀礼主義という視角から分析を行った。消費の節度を「財（サービス）を媒介とする安定した消費様式の反復および継続」と定義した上で、消費様式の安定化を志向する儀礼主義的な消費者を節度ある中庸の消費文化の潜在的な担い手として析出ことがその目的である。儀礼主義の尺度として清潔志向を構成した。その結果明らかになったことは、清潔志向の消費者は節度ある中庸の消費文化の担い手となる可能性があるということである。今後の課題は、今回の分析結果が上海に限らず、現代中国社会の消費様式の規定因として一般性をもつことを多角的に検証することである。

9. 研究分担者の畑山は、どのような価値意識が環境配慮消費に影響を与えているのかという視角から分析をおこなった。その結果明らかになったことは、第一に年齢高群では脱物質主義的価値意識と集団主義的価値意識が環境配慮消費に影響を持つということ、第二に年齢低群では価値意識の影響が見られずむしろ不安意識が大きな影響を持つということ、である。今後の課題は、この年齢層による環境配慮消費の相違が何に由来しているのかを明らかにすることである。

10. 研究協力者の本柳は、上海のサードプレイスの利用動向について分析をおこなった。その結果、上海のサードプレイスでは、オルデンバーグが考察したような「匿名性を背景とした交流」が求められていないことが明らかになった。上海におけるサードプレイスは、第一に、仲の良い知人と過ごす「親密性を背景とした交流」を目的として、第二に、「一人の時間を過ごす憩い」を目的として利用される傾向にある。今後の課題は、利用者の社会意識や消費態度を踏まえた分析、さらには、日本と中国のサードプレイスを比較した考察を進めていくことである。

11. 研究協力者の朝倉は、上海における生活意識と消費意識について、他者を意識する方向性という視角から分析をおこなった。他者を意識する方向性のうち、「他者とは違う」という側面（独自性志向）、「他者から浮かない」という側面（調和志向）、「他者との関係性を強める」という側面に着目した。その結果あきらかになったことは、第一に、生活意識と消費意識には他者を意識する方向性に関連があること、第二に、上海では調和志向よりも独自性志向が強いこと、第三に、「他者との関係性を強める」という側面は独自性志向や調和志向との関連が見いだせないこと。今後の課題は、使用する変数を精査することと、日中間の比較をおこなうことである。

以上さまざまな分析を行ったが、全体としては、予想以上に成熟し、先進諸国に近い消費者の姿が浮かび上がっており、また単純に整理できないものの、さまざまな中国的特殊性が見られることもわかった。しかし、まだ中国消費者の全貌が見えないので、今後調査方法、調査項目、さらには分析方法を改善しつつ、さらに本格的な上海市での調査を行い、同時に東京調査も行って、東アジアの二大主要都市における消費の、共通性および差異を明らかにしていきたい。

研究発表 (研究によって得られた研究経過・成果を発表した①～④について、該当するものを記入してください。該当するものが多い場合は主要なものを抜粋してください。)

- ①雑誌論文 (著者名、論文標題、雑誌名、巻号、発行年、ページ)
- ②図書 (著者名、出版社、書名、発行年、総ページ数)
- ③シンポジウム・公開講演会等の開催 (会名、開催日、開催場所)
- ④その他 (学会発表、研究報告書の印刷等)

4. 調査報告書

間々田孝夫, 2015, 「中国・上海における消費文化の構造」グローバル消費文化研究会編『ポスト・アメリカ化時代の消費社会研究——日中同時調査に向けて』立教大学社会学部, 7-22.

廣瀬毅士, 2015, 「上海消費社会調査の方法論と課題——社会調査論的整理と今後の改善にむけて」グローバル消費文化研究会編『ポスト・アメリカ化時代の消費社会研究——日中同時調査に向けて』立教大学社会学部, 23-36.

三田知実, 2015, 「上海都心部調査を通じた衣料消費の動向研究——国外高級ブランドと国外ファストファッションの所有点数に着目して」グローバル消費文化研究会編『ポスト・アメリカ化時代の消費社会研究——日中同時調査に向けて』立教大学社会学部, 37-49.

野尻洋平, 2015, 「インターネットと消費主義——上海消費社会におけるオンラインショッピングの規定要因」グローバル消費文化研究会編『ポスト・アメリカ化時代の消費社会研究——日中同時調査に向けて』立教大学社会学部, 50-64.

藤岡真之, 2015, 「上海の消費社会と健康に対する関心——東京との比較から」グローバル消費文化研究会編『ポスト・アメリカ化時代の消費社会研究——日中同時調査に向けて』立教大学社会学部, 65-78.

水原俊博, 2015, 「消費社会的価値意識と消費主義的態度——東京2010年調査と上海2014年調査の試論的比較検討」グローバル消費文化研究会編『ポスト・アメリカ化時代の消費社会研究——日中同時調査に向けて』立教大学社会学部, 79-89.

寺島拓幸, 2015, 「上海における消費主義の実証分析に向けて——東京圏調査との比較から」グローバル消費文化研究会編『ポスト・アメリカ化時代の消費社会研究——日中同時調査に向けて』立教大学社会学部, 90-98.

鈴木康治, 2015, 「上海における消費の節度——消費様式の安定化をめぐる」グローバル消費文化研究会編『ポスト・アメリカ化時代の消費社会研究——日中同時調査に向けて』立教大学社会学部, 99-110.

畑山要介, 2015, 「価値意識と環境配慮消費」グローバル消費文化研究会編『ポスト・アメリカ化時代の消費社会研究——日中同時調査に向けて』立教大学社会学部, 111-119.

本柳亨, 2015, 「上海におけるサードプレイスの利用動向」グローバル消費文化研究会編『ポスト・アメリカ化時代の消費社会研究——日中同時調査に向けて』立教大学社会学部, 120-131.

朝倉真粧美, 2015, 「上海における生活意識・消費意識と他者との関わり」グローバル消費文化研究会編『ポスト・アメリカ化時代の消費社会研究——日中同時調査に向けて』立教大学社会学部, 132-137.